発 20 章(1)　3 月 12 日午後、原発の町に「死の灰」が降った

（神田誠司、プロメテウスの罠４、学研パブリッシング、東京、2013、p.54-70）
2015 年 2 月 13 日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

毎月北東を向き黙祷

関東平野のほぼ中央に位置する埼玉県加須市の廃校となった旧騎西高校には、2012 年 11 月時点で約 50 人の福島県の双葉町からの避難者が住んでいる。そこでは毎月 11 日午後 2 時 46 分、東北の方角を向いて黙祷が行われている。その方角の約 200km 先に双葉町がある。双葉町は第一原発を中心とした 10km 圏にすっぽりと収まり、012 年 11 月時点で全域が警戒区域に指定されたままだった。

双葉町の「漂流」は地震翌日の 2012 年 3 月 12 日から始まった。政府の 10km 圏外への避難指示を受け、約 6900 人の町民の多くは北西に 40km 離れた川俣町へ移動、19 日に約 1200 人の町民がさいたま市に再避難、3 月末に加須市へと落ち着いた。原発事故で多くの自治体が役場機能の移転を余儀なくされたが、圏外へ移転したのは双葉町だけであった。町長である井戸川克隆の独断だった。

原発がダメになる

井戸川は公務での外出中に地震を体験した。彼は 2 号炉の建設に関わった人間であり、地震の際も第一原発の事が頭に浮かんだ。双葉市は津波の被害も受け、その夜、役場は津波被害集落での救出準備に追われた。まさか全町避難になるとは、このとき井戸川は思いもしなかった。

7 千人を受け入れて

翌日、政府が半径 10km 圏内の住民に避難を指示した。海岸沿いを走る幹線道路は津波の被害にあって使えないため、太平洋を背にして西に向かうしかなかった。北西約 40km にある川俣町が頭に浮かび、井戸川が川俣町の町長古川道郎に電話した。人口 1 万 5 千人の川俣町が 7 千人の避難者を受け入れることは可能なのかと思ったものの、井戸川や双葉町民の心情を考えると古川は断れなかった。午前 7 時 40 分、一斉に避難が始まった。

「死の灰」降ってきた

午後 3 時半頃、井戸川が町の福祉施設で避難誘導にあたっていた時、爆発音の後 2,3 分後に空からぼたん雪のようなものが降ってきた。大きさは五百円玉サイズから手拳大まで様々だった。

安全神話は崩壊した

「ぼたん雪」をかぶった井戸川たちはすぐに建物内に避難したが、このとき放射性物質を浴びてしまう。日本では 1954 年、米国の水爆実験で被曝した第五福竜丸事件の時に「死の灰」と呼ばれた同様のものが降り、後に死者が出た。「死の灰」はおよそ 10 分の間降った。原発を推進していた井戸川の頭の中は東電や国、そして自身への怒りでないまぜになっていた。

あふれかえる避難民

双葉町から川俣町への避難者は約 3500 人ほどであった。しかし川俣町には浪江町や南相馬市からの避難者も押し寄せており、ピーク時には 7 千人近くの避難者で溢れかえった。婦人会、消防団、あらゆる団体が避難者対応にあたった。しかし人口 1 万 5 千人の町で人口の半分近い避難者というのは負担が大きすぎるためいつまでも世話になるわけにはいかず、線量計の数値が上がっていることから川俣町にも放射性物質が飛んできていることを知った井戸川は更に遠くへの避難を決めた。

「え、埼玉県か」

福島第一原発が予断を許さない状況だったため、より遠くへ避難する必要があった。井戸川が災害対策本部の幹部会議でさいたま市へ行くと告げた際、その判断に幹部たちは納得した。しかし、避難者たちからは「なぜそんな遠くへ」「何が起こっているのか」といった声が上がった。秘書広報課課長の大住宗重はそんな声にそれぞれ、できるだけ丁寧に答えた。突然の二次避難、それも県外。住民の戸惑いは当然と思ったからだ。

【考察】

双葉町町民は町長の迅速な決断によって二次避難し、さらなる被曝避ける事ができた。災害時の地方自治体の決断は、政府以上に住民の以後の生活を決定づける。したがって地方自治体にこそ優れたリーダー、またはその役割を担う組織が必要だと感じた。双葉町長の例では独断での二次避難決定という、民主主義を無視した行為を行ったが、体裁を守ることや、責任を逃れることを考えずに、人命を優先したことで被害拡大を抑えることができた。非常時に何を優先すべきか判断を誤らないことが重要である。

日本は地震の多い国であり、遠くない将来起こるとされている大型地震もある。地震そのものを防ぐことはできないが、それに備えての市役所、町役場内での訓練や、避難先の確保は、災害における二次被害を大きく減らすことにつながると考える。